中島幸介（長崎大学大学院経済学研究科博士後期課程）

中小企業における同族経営と
内部統制システム
－金剛組の事例を通じて－

研究論集（長崎大学）　No.11
pp.1～40　2016.9.

1　本論文の特徴（概要）

本論文は，中小企業における同族経営と内部統制が果たす機能との関連性について，法学および経営学の視点から，世界最古の企業ともよばれる金剛組（建築業）の近年の事例を中心に，論じたものである。筆者は，2015 年にも同論集において，2008 年に経営破たんした辻産業株式会社に着目していることからも，中小企業の内部統制システムに関心を持っていることがうかがえる。

筆者は，本論文での分析視角として，論文および新聞，雑誌なども含めた二次資料を多く用いながら，従来の法学的な視点に経営学の視点を加えて考察を行い，内部統制システムが果たす積極的な機能（会社をより良いものに改善していくという機能）に着目し，その必要性を探求するという挑戦的な試みを行っている。

経営学の研究はこれまで，成長や拡大について多く論じられてきたものの，近年，存続や衰退などについても論じられるようになってきた。本論文もまた，後者の部分について着目しているが，法律的な観点も含めた意欲作であると考える。

2　構成と内容（本論文の構成）

本論文は大きく 10 の節にわけて構成される。

第 1 節では，上記でも述べたように，本論文の目的を示すとともに，分析のキーワードとなる「内部統制システム」について，企業会計審議会および 2006 年施行の会社法を参照しながら定義づけがなされた。

第 2 節では，世界最古の企業ともよばれる金剛組の前近代の概要を二次資料を用いながら紹介し，その特徴を論じている。

第 3 節では，同組織の近代における建築の技術的あるいは経営的な側面について，先行研究を引用しながら論じている。

第 4 節では，金剛組による過剰な設備投資と一般建築への多角化が論じられ，その上で第 5 節では，業績悪化ならびに，採算度外視のどんぶり勘定である社内風土が示され，赤字幅の拡大が示された。

第 6 節では，創業家当主の改革と失敗を論じ，民事再生か会社更生かを検討するまでに至る状況が示された。

第 7 節では，このような状況下で連携を深めたメインバンクと髙松建設の取り組みが示された。

第 8 節では，髙松建設の傘下に入った後の改革を示し，第 9 節では，これらの一連の流れをまとめたうえで，金剛組が経営破たんに至った要因の 1 つに，内部統制の不備があったと指摘する。そのため，こうした内部統制システムの具備が必要であると筆者は主張する。

第 10 節において，今後の課題を示し，内部統制システムを具備しなかったがために破たんした事例だけでなく，具備したことによって破たんを回避できた事例を検討する必要があると論じている。

3　本論文の貢献と評価（検討）

本論文の意義は大別して 3 点あると考える。

第１に，先行研究をレビューしたうえで，これまで法学的な視点で内部統制システムは着目されてきたが，そこに経営学的な視点も加えることによって，新たな考えを導き出すことが出来たということである。第２に，その内部統制システムを具に長期的なスパンで事例を調査し，同族経営の維持の問題点などについても示された。そのうえで第３に，内部統制システムの具備の必要性を明らかにした。

最後に課題と要望を論じて締めくくりたい。本論文は，雑誌や新聞，論文などを用いて金剛組の成長から衰退に至るまで論じられているが，二次資料に頼った情報であるため，その真偽について，考察する必要があると考える。経営史や企業史では，史料批判を行うことは常であり，また真偽を確かめるための調査は欠かせない。私自身も同社の研究を重ねてきた一人であるが，引用文献の信憑性に疑念を感じる点もみられた。今後，より精査された歴史的背景や特徴についても論じることによって新たな視点が見出せるのではないかと考える。

また，基本的な点でも指摘したい。本論文では，大学院の紀要ということではあるものの，誤字脱字が散見され，また経営学の理論の引用がやや不自然に挿入されてしまっていることで，論理の飛躍が散見された。こうしたことは，論文の価値を下げてしまいかねず，より精査する必要があろう。しかし，いずれにしても法律と経営分野の橋渡しとなり得る重要な研究であると同時に，今後の研究の発展に期待したい。

（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授　曽根秀一）